

日蓮大聖人御書全集

いつししょうじょうぶつししょう

一生成仏抄

新版
316
〜
318

一生成仏抄

けんちよう

ねん

建長7年('55)

さい

34歳

ときじようにん

(富木常忍)

そ むし しようじ とど

たびけつじよう

むじようぼだい

夫れ、無始の生死を留めて、この度決定して無上菩提を

しよ おも

しゆじようほんぬ

みようり

かん

証せんと思わば、すべからく衆生本有の妙理を觀ずべし。

しゆじようほんぬ みようり

みようほうれんげきよう

ゆえ

衆生本有の妙理とは、妙法蓮華經これなり。故に、

みようほうれんげきよう とな

しゆじようほんぬ

みようり

かん

妙法蓮華經と唱えたてまつれば、衆生本有の妙理を觀ず

るにてあるなり。

もんりしんしよ きようおう

もんじそくじつそう

じつそうそくみようほう

文理真正の經王なれば、文字即実相なり、実相即妙法

せん

いつしんほうかい

むね

と

あらわ

なり。ただ詮ずるところは、一心法界の旨を説き顯すを

みょうほう

な

ゆえ

きょう

しよぶつ

ちえ

い

妙法と名づく。故に、この経を「諸仏の智慧」とは云う

いっしんほうかい

むね

じっかいさんぜん

えしやう

しきしん

ひじやうそうもく

なり。一心法界の旨とは、十界三千の依正・色心・非情草木・

こくうさつど

のぞ

塵

のこ

いちねん

こころ

おさ

虚空刹土、いずれも除かずちりも残らず一念の心に収めて、

いちねん

こころ

ほうかい

へんまん

さ

ばんぼう

い

この一念の心、法界に遍満するを指して、万法とは云うな

り かくち

いっしんほうかい

い

り。この理を覚知するを、一心法界とも云うなるべし。

みょうほうれんげきやう

とな

たも

こしん

ただし、妙法蓮華経と唱え持つというとも、もし己心の

ほか

ほう

おも

まった

みょうほう

そほう

そほう

外に法ありと思わば、全く妙法にあらず、麤法なり。麤法

こんきやう

こんきやう

ほうべん

こんもん

は今経にあらず。今経にあざれば、方便なり、権門な

ほうべん

こんもん

おし

じやうぶつ

じきどう

じやうぶつ

り。方便・権門の教えならば、成仏の直道にあらず。成仏

の直道にあらざれば、多生曠劫の修行を経て成仏すべき

ゆえ

いつしやうじやうぶつかな

ゆえ

みやうほう

とな

にあらざる故に、一生成仏叶いがたし。故に、妙法と唱

れんげ

よ

とき

わ

いちねん

さ

みやうほうれんげきやう

な

え蓮華と読まん時は、我が一念を指して妙法蓮華経と名づ

ふか

しんじん

おこ

くるぞと深く信心を発すべきなり。

いちだいはちまん

しやうぎやう

さんぜじつぼう

もろもろ

ぶつぼさつ

わ

すべて一代八万の聖教、三世十方の諸の仏菩薩も、我

こころ

ほか

あ

おも

が心の外に有りとはゆめゆめ思いうべからず。しかれば、

ぶつきやう

なら

しんしやう

かん

まった

しやうじ

仏教を習うといえども、心性を觀ぜざれば、全く生死を

はな

しんげ

どう

もと

まんぎやうまんぜん

しゆ

離ることなきなり。もし心外に道を求めて万行万善を修

たと

びんぐ

ひと

にちや

となり

たから

かぞ

せんは、譬えば、貧窮の人、日夜に隣の財を計えたれど

も、半銭の得分もなきがごとし。
はんせん とくぶん

しかれば、天台の釈の中には「もし心を観ぜざれば、
てんだい しゃく なか ところ かん

重罪滅せず」とて、もし心を観ぜざれば、無量の苦行と
じゅうざいめつ ところ かん むりよう くぎよう

なると判ぜり。故に、かくのごときの人をば、「仏法を学し
はん へん へん げん ぶつぽう がく

て外道となる」と恥じしめられたり。ここをもつて、止観に
げんどう は しかん

は「仏教を学すといえども、還つて外見に同ず」と釈せ
ぶつきよう がく へん げん どう しゃく

り。しかるあいだ、仏の名を唱え、経巻をよみ、花をちら
ほとけ みな とな きようかん 読 はな 散

し、香をひねるまでも、皆、我が一念に納めたる功德・善根
こう 拈 みな わ いちねん おさ くどく ぜんこん

なりと信心を取るべきなり。
しんじん と

じょうみようきよう

なか

しよぶつ

げだつ

しゆじよう

これによつて、浄名経の中には「諸仏の解脱を衆生の

しんぎよう もと

しゆじようそくぼだい

しようじそくねはん

あ

心行に求めば、衆生即菩提なり、生死即涅槃なり」と明か

しゆじよう こころ 汚

ど

こころきよ

せり。また「衆生の心けがるれば土もけがれ、心清けれ

ど きよ

じようど

えど

ど ふた

へだ

ば土も清し」とて、浄土といひ穢土というも、土に二つの隔

われ

こころ

ぜんあく

み

しゆじよう

てなし、ただ我らが心の善悪によると見えたり。衆生と

ほとけ

まよ

とき

しゆじよう

な

いうも仏というも、またかくのごとし。迷う時は衆生と名

さと

とき

ほとけ

な

たと

あんきよう

みが

づけ、悟る時をば仏と名づけたり。譬えば、閻鏡も磨き

たま

み

ただいま

いちねんむみよう

めいしん

みが

ぬれば玉と見ゆるがごとし。只今も、一念無明の迷心は磨か

かがみ

みが

かなら

ほつしようしんによ

みようきよう

な

ざる鏡なり。これを磨かば、必ず法性真如の明鏡と成

るべし。

ふか しんじん おこ

にちやちようぼ

おこた

みが

深く信心を發して、日夜朝暮にまた懈らず磨くべし。い

みが

なんようほうれんげきよう

とな

かようにしてか磨くべき。ただ南無妙法蓮華經と唱えたて

磨

まつるを、これをみがくとはいうなり。

みよう

なん

こころ

わ

いちねん

こころ

そもそも、妙とは何という心ぞや。ただ我が一念の心

ふしぎ

みよう

い

ふしぎ

こころ

およ

不思議なるところを妙とは云うなり。不思議とは、心も及

ことば

およ

ばず語も及ばずということなり。しかればすなわち、起こ

いちねん

こころ

たず

み

あ

い

るところの一念の心を尋ね見れば、有りと云わんとすれば

いろ

かたち

な

い

ようよう

こころ

お

色も質もなし。また無しと云わんとすれば様々に心起こ

る。有りあと思おもうべきにあらず、無なしと思おもうべきにもあらず。

有無うむの二つの語ことばも及およばず、有無うむの二つの心こころも及およばず。有無うむ

にあらずしてしかも有無うむに遍へんして、中道一実ちゆうどういちじつの妙体みようたいにし

て不思議ふしぎなるを妙みようとは名なづくるなり。この妙みようなる心こころを名

づけて法ほうともいいうなり。この法門ほうもんの不思議ふしぎをあらわすに、譬たと

えを事法じほうにかたどりて蓮華れんげと名なづく。一心いっしんを妙みようと知りぬれ

ばまた転てんじて余心よしんをも妙法みようほうと知しるところを、妙経みようきようとはい

うなり。しかればすなわち、善悪ぜんあくに付ついて起おこり起おこると

ころの念心ねんしんの当体とうたいを指さして、これ妙法みようほうの体たいと説とき宣のべたる

きようおう

じようぶつ

じぎど

経王なれば、成仏の直道とはいふなり。

むね ふか しん みようほうれんげきよう とな

いつしやうじやうぶつ

この旨を深く信じて妙法蓮華経と唱えば、一生成仏さ

うたが

ゆえ

きようもん

われめつど

のち

らに疑いあるべからず。故に、经文には「我滅度して後に

まさ

きよう

じゆじ

ひと

ぶつど

において、応にこの経を受持すべし。この人は仏道において、

けつじよう

うたが

宣

ふしん

決定して疑いあることなけん」とのべたり。ゆめゆめ不審

いつしやうじやうぶつ

をなすべからず。あなかしこ、あなかしこ。一生成仏の

しんじん

なんみやうほうれんげきよう

なんみやうほうれんげきよう

信心、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。

にちれん

かおう

日蓮

花押